

令和7年度入学試験問題（学校推薦型選抜Ⅰ）

小 論 文

初等教育教員養成課程
小学校教育専攻プログラム

注意事項

1. 解答は、すべて別紙解答紙の指定の箇所に横書きで記入すること。
2. 解答紙には必ず受験番号を記入すること。

【問】 次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。

自己肯定感を高めようといって、そのコツを伝授する類いの本が書店にたくさん並んでいることを紹介しました。それはつまり、自己肯定感をなんとしても高めないといけないと思い込まされている人が多いこと、しかも自分は自己肯定感が高くないのでなんとかしないといけないと思い込み、悩み苦しんでいる人が多いことを意味します。

その類いのノウハウの中には、「自分はできる」「自分はすごい」「自分はこのままでいい」「今のままの自分で十分だ」と自己暗示をかけようというようなものもあります。自己肯定できるように自己暗示をかけようというわけです。

たしかに自己暗示は有効かもしれませんが、でも、自己暗示で高められた自己肯定感というのは、上辺だけの張り子の自己肯定感にすぎません。なんの経験の裏づけもない自己肯定感では、いざというときに力になってくれません。逆境では、すぐに崩れてしまうような脆い自己肯定感になってしまうでしょう。

(中略) ほんとうに大事なものは、経験に裏打ちされ、地に足の着いた自己肯定感です。ゆえに、△手っ取り早く自己肯定感を高めるためのノウハウに頼る限り、真の自己肯定感が高まることは望めません。

自己肯定感というのは、あくまでも地道な努力の結果として自然に身につくものであって、小手先のテクニックで手に入るようなものではないのです。

では、実際に自己肯定感を高めていくには、どうしたらよいのでしょうか。(中略) 大人にも子どもにもあてはまる、自然に自己肯定感が育まれ、熟成される仕組みについて考えてみましょう。

自己肯定感というのは、一種の自己評価なので、自己評価がどのようにつくられていくのかを知れば、自己肯定感につながるような経験にはどのようなものがあるかを知るヒントが得られます。

私は、専門書や論文の中で、自己評価の形成要因をつぎのように整理しています。

①他者から与えられた評価や評価的態度

②他者との比較

③実際の成功・失敗体験

④理想とする自己像との比較

B 自己肯定感に関して言えば、これらの自己評価要因が絡み合って自己肯定感が形成されていくのでしょう。

自分の中の誇らしい面、自信のある面は、かつて人から肯定的な評価を受けたことがあることが多いものです。その意味で、人から与えられた評価や評価的態度は、自己肯定感の形成に大いに影響すると言えます。

また、自分を評価するにあたって、人との比較というのは最もわかりやすい基準と言えます。周りの人と比べて優れていれば誇らしく思い、自己肯定感が高まります。

勉強でも、習い事でも、スポーツでも、趣味・遊びでも、うまくできれば誇らしい気持ちになり、自己肯定感が高まります。このように実際の成功・失敗体験も、自己肯定感の重要な形成要因になります。

認知能力が発達し、抽象的思考が発達してくる思春期頃になると、理想の自己像を思い描くようになります。そうすると、理想とする自己像と比べて、自分はまだまだだと思えば自己肯定感が低くなり、近づきつつあると思えば自己肯定感が高まります。

このように、他者から与えられた評価や評価的態度により周囲から受け入れられていると感じたり、他者との比較により人並みにやっていると感じたり、実際の成功体験によりこの先もそれなりにうまくやっていると感じたり、理想とする自己像との比較により自分なりにある程度納得できると感じたりするとき、自己肯定感が高まります。

実際に私たちが他者とのかかわりの中で自己を評価する際には、これらの基準が複合的に絡み合っていきます。

たとえば、他者から高く評価してもらえなくても、理想とする自己像に近づいていると感じれば自己肯定感が高まると考えられますが、他者による承認に依存している場合は、自己肯定感は低くなるでしょう。

周囲の人たちよりうまくできていると感じれば、自己肯定感が高まりますが、理想とする自己像の基準がさらに高ければ自己肯定感が高まらないでしょうし、他者から

の期待もさらに高く、なかなか認めてもらえない場合は自己肯定感が低くなると考えられます。

他者が認めてくれるかどうかは、自分ではどうにもならないところがあるので、他者による承認に振り回されていると、なかなか自己評価が落ち着きません。また、自分が成長しても、周囲の仲間がもっと成長したら、自分の頑張りを肯定しづらいかもしれません。

その意味では、実際に成功体験を得られるように知識や技術を身につけて頑張ったり、他者との比較でなく理想とする自己像との比較をもとに自分の理想に近づく努力をしたりすることが、とても大事なことと言えます。自己肯定感を追求するのではなく、自分自身の成長を目指すのです。

そんなふうに前向きに頑張っている自分を感じることで、自己肯定感は着実に高まっていくはずです。

人生は親のもとで始まります。私たち人間は、保護されないと生きていけない、まったく無力の状態生まれ、親のもとで生きる力をつけていきます。

ゆえに、親から愛情深く受容されて育つことが必要不可欠となります。何ができる、できないといったことに関係なく、わが子として受け入れられることが自己肯定感の基盤になります。

その際、必ずしもほめられることが愛情深く受け入れられていることを意味するわけではありません。

営業マンが取引先にお世辞のようなほめ言葉を連発するケースとは違うにしても、親や教師が子どもをほめる場合も、ほんとうにその子のことを心から思っほめているのかを自分に問いかけてみる必要があるでしょう。

たとえば、言うことを聞いてほしくてほめるような場合は、自分の思うように操作したくてほめているわけで、営業用のお世辞とあまり変わりません。

近頃は、子どもに嫌われたくないから、厳しいことは言わずにほめているという親も少なくないようですが、それではほんとうに子どものためを思っているとは言えません。子どもの社会適応を促すために厳しいことを言わなければならない場面でも、嫌われたくない、気まずくなりたくないということで、ご機嫌を取るかのようにほめ

言葉を発する。これでは子どもの社会適応は進まず、自己肯定感も高まりません。

相手のことを心から受け入れているかどうか、相手のために心から思っているかどうかは、ほめるとかほめないとかいった次元を超えたもののはずです。言葉でどのように言うかなどは、表面的な問題にすぎません。

やさしい言葉をかけてもらえばうれしいし、厳しい言葉を投げかけられると気分が沈んだり反発したりする気持ちが湧いてくるでしょう。でも、そうした言葉そのものを超えた次元に、相手を受け入れるとか相手のために思うといった心の構えがあるのです。

(出典) 榎本博明 (著) 『^{じ ここうていかん}自己肯定感という呪縛^{じゅばく}』青春新書、2021 年、pp.148-154 (設問の都合により本文の一部を省略・改変している。また常用漢字外の漢字には振り仮名を付した。)

（問１）下線部Ａの「手っ取り早く自己肯定感を高めるためのノウハウ」とは、どのようなものを指すのでしょうか。本文中から１５字以上２０字以内で最も適切な箇所を抜き出さない。

（問２）下線部Ｂのように、著者は４つの要因が絡み合って自己肯定感が形成されるだろうと主張していますが、これらの要因の中であなたが考える最も大きな要因をあえて１つだけ選ぶとしたらどれを選びますか。その理由も含めて１５０字以上２００字以内で述べなさい。

（問３）あなたが将来小学校の教師となったときに、どのようなことを大切にしながら子どもと関わろうと考えるのかについて、筆者の主張と関連付けながら、２５０字以上３００字以内で述べなさい。その際、低学年への関わり方と高学年への関わり方、それぞれについて述べなさい。